

前ではいつもニコッと笑って、おもてなしをしていたんですよ。あ、人前では決して辛い姿を見せなかった。重田 その姿を見て、たとえいろんな壁にぶち当たっても、あのおふくろが負けなかったんだから、絶対に俺も負けるわけにいかないと思えましたね。おふくろはいつも言っていました。「辛い時に辛い顔をする。これは誰でもできる。同情を買うこともできる。それは男じゃない。男はね、辛い時こそ笑うんだ」って。それと、「信用金蔵」。信用があれば蔵を立てられるほどのお金を集めることができるし、何でもできると。あとは、「武士は食わねど高

何とか二つとも達成しました。だけど、不動産をやっても全然飯が食えないわけです。それで日銭を稼ぐには飲食業だなと思った時に、大学時代にアルバイトしていた博多の焼鳥屋「屯所」の味、あの感動が甦ってきました。それでお世話になった店長にアメリカから電話をしたんです。「こっちで店を出したいから修業させてほしい」って。そうしたら店長は「重田か、おまえならいいよ。教えてやる」とおっしゃってくださいました。重みのある言葉です。重田 これはいまスタッフによく話すんですけど、もし普通にアルバイトをしていただけたら、この言葉は出てこなかったと思うんです。当時私は一割も飲食業をやるとは思っていませんでしたから、ある意味では手を抜いてもよかったですけど、「五百円の時給を千円払っても安いと思ってもらえる仕事をしよう」と心掛けていました。その働きぶりを覚えてくれたからこそ、その言葉に繋がったのだと思います。だから私が伝えたいのは、目の前に置かれている出来事、状況は

追いかけているうちは入ってこない。重田 その後、日本で二か月間みっちり修業し、戻ってきて物件を探していききました。こっちは車社会ですから、店の大きさに応じて駐車場を何台確保しなきゃならぬという法律があって、役所に行くたびにその審査に引っ掛かる。唾で一番なるって(笑)。入学時、身長は百五十五センチ、体重も五十キロくらいと小さかったんですが、一週間で同じ学年の十三クラスをまとめ上げ、一年生の終わり頃には校内で逆らう者はいなくなり、二年生の時には他校の番長にも勝ち続けて鹿兒島の総番と言われるまでになりました。ただ、自分より身体の小さい人間や喧嘩をする気のない人間とは一切やりませんでしたし、親父と約束していたからタバコも一切吸わなかったんです。それと、やんちゃしているから成績が悪くて普通じゃないですか。それが嫌で、勉強もして、成績は常に上位に入っていたんです。そこが普通の人と違いますね。重田 その当時は、何でもできるって勘違いしていました。家業を継ぐつもりで高校、大学と土木工学科で学んでいたんですけど、就職活動の時期になって、「俺は一人何ができるんだらう。自分の力を試したい」という思いが沸々と湧き起こってきたんです。そんな時に兄貴からアメリカの話聞き、「世界一の大国アメリカで何かやってみたい」と。それで

大学卒業直後の一九八八年四月にロサンゼルスへと渡ったんです。重田 まずは英語を勉強しようとして、語学学校へ通いましたが、授業料を払い続けることができず、半年間でやめざるを得ませんでした。英語をまともに喋れないまま日本に帰るのは嫌だったので、「俺はアメリカで誰もできない道を開くんだ」と自分に言い聞かせていた。その時に漠然と町をつくりたいなと思ったんです。それにはまず不動産だなと。でも、資格を持っていても英語もろくにできない人間は信用されませんよね。自分の強みを生かしてどうインパクトを掴むか、いろいろ考えまして、「空手の全米大会に初出場が初優勝する」「不動産の資格試験に一発で合格する」、この二つを目標に掲げて、空手の道場仲間にも公言しました。言ったらやらないかんわけですから、もう必死です。朝は弁当配達のアアルバイトをして、日中は十時間くらい空手道場で稽古をして、夜は資格の勉強をする。睡眠時間は毎日三時間もなかったんじゃないかな。そういう生活を一年続け

「目の前に与えられた仕事に対して常に堂々と全力で向き合う。その姿勢が信用を生むし、結果も自ずとついてくるんです」



楊枝」。「為せば成る 為さぬば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり」という言葉を耳にタコができるほど聞いていました。アメリカに来ていろいろ逆境や困難に出くわす度に、それらの言葉が甦ってきたんです。これは何物にも代えがたい私の財産です。素晴らしいご両親の生き方が重田さんの人格形成の礎になっているのでしょね。重田 子供の頃は次男に生まれたことや周りの友達と遊んでいる中朝から晩まで働かされることを恨んだりもしました。でも、いまはその環境がすごくよかったです。二百割感謝ですね。

その人に何かしら必要だから起こっているのだから、それを自分の心が決めるということ。自分に向いているか向いていないか、やりたいかやりたくないかという次元ではなく、目の前に与えられた仕事に対して常に堂々と全力で向き合う。自分に嘘をつかず、一所懸命働く。その姿勢が目に見えない無形の財産。つまり信用を生むし、結果も自ずとついてくるんです。まさに「信用金蔵」ですね。重田 そうやって一つひとつの縁を大事にしてきた結果がいまの自分であると思っています。人は皆何かしらの恩恵を受けているわけで、一人で成功したということは絶対にあり得ないですから。

最初の一月はこっちに住む日本人のお客様がたくさん来てくださって、予想以上の売り上げを挙げる事ができました。ところが二か月目から半分以下に落ちたんです。ど素人集団でしたし、道場生を使っているから、ミスをしてあげが下がって大変なわけです。どうしようかなと思った時に、「よし、決めた」と。一か月目の売り上げと並ぶまでは三百六十五日、休みを取らない。飲みにも行かない、と自分に課して仕事に打ち込んでいきました。並々ならぬ決意です。重田 当時、年中無休で営業している店はなかったですね。その間は給料も出ないし、借金も返せない。もう営業しながら勉強でも味見をして試行錯誤する。それが段々と様になって、ちょうど丸一年経った時に並んだんです。ただ、いま考えたら数字やお金を追いかけているうちはなかなか